

優遊悠

晴耕雨悦

木村 幸治
=10=

「出たよ、あいつが」

「あいつ、つて？」

「タヌキだよ。今朝、太陽が上がる前に」

田土さんは、台所の窓越し10分先にある私の畑で歩いて見たのを見たらしい。

前年、トウモロコシを荒らされた人が田土さんである。

宮内さんはスイカの被害者だ。「1年目です。完熟に近かったので収穫日を決めてた。その朝、皮だけ残して、裏側に歯形がね。無念でしたな」

一句、浮かんだ。
「狸来て西瓜の種子を

飛ばしおり」

宮内さん、2年目には周

りを網で囲い、土を掘る習性に対抗して網の下側を20センチほど土に埋めた。今度は無事に大玉スイカがとれた。

「やつこさんとの勝負は1勝1敗。今年が正念場ですよ」

宮内さんは笑った。

スイカはウリ科の一年草。エジプトでは4千年以上前から栽培されていたらしい。日本では夏の風物詩で、大衆的な人気の逸品である。

それを作る予定の私に夕



絵・小池邦夫

タヌキとの勝負の行方

スイカ

又キ対策の難題が降りかかったのだ。作戦を練った。タヌキは雑食で昆虫、カエル、ヘビ、ネズミなどの動物類も、ナシ、ブドウ、ビワ、イチモなどの植物類もこなす。

作物に多めの網をめぐらしての「空中栽培」を考えた。耕作地の狭さ対策も兼ねている。実が育ったら、それを串つりにして、上下左右から網でガードするのだ。

結果から書こう。「小玉」品種は順調に成長した。旺盛に増えたツルが網の外にまで伸び、夢と好奇心で植えていたリンゴの枝にさらに3個の実がぶら下がった。

そんなスイカをタヌキが盗りに来なかったのは、処女耕作人の悪戦苦闘に同情したからに違いない。

上からのアミ囲いで成功したのが、田土さんの「大玉」だ。台所からの手渡しでよく冷えた一切れをもらい、畑で食べた。甘い。作り手の年輪と技量とが心にしみた。

宮内さんに「3戦目」の決着はどうだったのか、尋ねる日も近い。

(作家||東串良町出身)